

2015 年度
産経新聞大阪本社
インターンシップ報告書

関西学院大学 産業研究所

2015年度 産経新聞大阪本社 インターンシップ 概要

■**インターンシップの目的**：就業体験を通じ、以下の事柄を理解する。

- ①社会理解—組織の様々な側面に触れ、社会全体との関わりを理解する。
- ②職業理解—仕事や業界に対する視野を広げ、職業意識を明確にする。
- ③自己理解—社会から期待される能力・資質について理解し、卒業までの目標を再設定する。

■日時・定員

日 時：2016年2月15日（月）～2月19日（金）

定 員：5名

■応募資格

以下の要件をすべて満たす方。

- ①「経済事情F」を受講していること。
- ②学部生。ただし2016年3月に卒業予定の方を除く。
- ③実習先が指定する実習日の全日程に参加することができる方。

■実習内容

2月15日（月）夕刊製作現場見学、JICAの記者説明会

2月16日（火）産経west製作現場見学、大阪地裁見学

2月17日（水）大阪府警見学、大阪府庁見学

2月18日（木）取材方法インストラクション、大阪市庁見学

2月19日（金）取材、記事の作成、フィードバック

■派遣者

- ・社会学部2年／男子
- ・社会学部2年／女子
- ・経済学部3年／男子 3名

■参加学生の実習目標（報告書より）

- ・新聞社の裏側を知る。
- ・仕事を知る。記者として何が大切なのかを深く理解する。
- ・産経新聞社はどのようなところで何をしているのか。また社員さんは何を考え何をしているのか。それを知った上で私と産経新聞の関係性はどうあるべきかを見定めたい。
- ・新聞社の社会的役割を見極める

- ・新聞社の”中身”を知る

■インターンシップを通して学んだこと（仕事、社会、自分）

- ・当初の目標通り、新聞社の裏側をたくさん知ることができた。新聞には版がいくつもあって地域によって内容が違うことなどは、インターンに参加しなければずっと知らないままだっただろう。思った以上に新聞にマーケティングの考えが浸透していることにも驚いた。報道=正しい情報を伝えるという認識から、新聞は公的なものに近いと勝手に思っていたけれど、ビジネスなのだ実感した。また、働き方という面でも、参加前とイメージがだいぶ変わった。参加前は、新聞社=硬いというイメージだった。しかし、本当は（いい意味で）自由だということがわかった。締め切りを守れば、ある程度自分に都合のいいようにスケジュールを組んで動けるとするのは魅力的だと思う。男女比率も、やはり男性が多い印象ではあったけれど、部署によってはほとんど女性のところもあるなど、男女の働き方の違いが少し見えた気がした。
- ・どのようなことが将来したいのか、よくわからない状態で挑んだ今回のインターンシップ。働くという事を身近に感じる事が出来た。今回勉強させていただいたのは記者という仕事であったが、信用というものが一番大事という言葉は、全ての会社に共通する事であると感じた。新聞社というものは情報を扱っているところであり、情報に価値を付けて販売しているという言い方が出来る業界であるが、情報を提供してくれる人がいなければ成り立たない業種でもある。情報は信頼関係がなければ手に入れることが出来ない。しかし、それは他の職業にしても同じなのではないだろうか、サービス業や、商社、などでも顧客との信頼関係がなければ成り立たないものであり、結局組織は人なのだなと感じた。自分はまだ自分の行く先についてしっかりと決まっているわけではないが、今回得た事としては、どのような職業を進むにしても、信頼される人間になりたいと感じるようになった。自分の個性を発揮する事が出来る事はもちろん、あの人がいなければと言われるような人間になる事が自分のこれからの課題なのかもしれないと感じた。これからも努力を惜しまずに行動していきたい。
- ・私がこのインターンシップを通じて学んだことは大きく分けて2つある。1つは当然、新聞記者という職業の魅力を知ったことだ。各々の社会情勢について、最前線で学び続けている記者の方々は、非常に魅力的な人間だった。そして記者さんの持つ「社会正義」という価値観には、少なからず共感を覚えた。もう1つは仕事に対しての価値観が変わったことだ。このインターンシップに行く以前、私は就職するという事に対してネガティブなイメージしか持ち合わせていなかった。しかし今回、厳しいながらもやりがいを持って仕事に挑む方々を見て、労働のイメージが大きく変わった。学生生活も良いが、社会人生活もまた楽しそうだ。
- ・新聞社は社会のあらゆる出来事と私たち読者を結びつける役割を果たしていることを知

った。例えば、読者側は身近な地域の情報や話題の情報を求めるが、それに対し新聞社は読者の代わりになって情報を調べ記事にしてそれを伝えるという役割を果たす。それだけでなく、情報元が読者に伝えたいことを新聞という媒体を通して伝えるという役割を果たすこともある。これらから新聞社が読者の代理人でありまた情報元の代弁者であるということに思えた。また、このインターンシップを通して、自分の社会のニュースに対する関心の低さを実感した。記者の方々は分野を問わずあらゆる面での知識や関心を持っていた。社会の出来事に関心を向けることは、新聞社に限らず社会では必ず求められるものであると感じた。

- ・今回のインターンシップを通して、新聞社での仕事に対して具体的なイメージを持つことが出来ました。新聞社での仕事は大変な面もありますが、それ以上にやりがい、社会において必要とされている仕事だということが改めて認識できました。また、様々な記者の方とお会いする機会がありましたがどの方も目が生き生きとされていて、仕事に対して誇りを持っている様子がかえりました。どのような職に就くにあっても、そういった精神が大切なんだという事を改めて認識しました。将来は新聞社も視野に入れて自分の道を決めていきたいと思います。

■今後の学生生活について（活かしたいこと、課題）

- ・今回のインターンシップは、私にとっては初めてのインターンシップだった。初めてのインターンが産経新聞社で本当によかったと思う。みなさん（関西出身の方は特に）とても優しく接して下さったし、インターン生にできるだけたくさん経験をさせてあげようという風に考えてくださっているのが伝わってきて、非常にありがたかった。今回の経験で、自分には社会で生きていくだけの礼儀や常識が足りないと感じた。自分では精一杯やっていたつもりだけれど、みなさんに不快な思いをさせていたらどうしようかと不安だ。これから就職活動が本格化するにあたり、礼儀や常識は非常に重要になってくると思うので、努力して身に付けていきたい。
- ・今後の大学生活においては、疑問や好奇心を大事にしようという事考えるようになった。記者という仕事は、知的好奇心を持つ人でなくては務まらないだろう。知的好奇心が多い人は疑問を多く持つがそれをつまらない事と切り捨てないで、大事にすることで、何か新しい発見や感動を見つけることが出来るのではないだろうか。それはこれからの長い人生をより豊かにしてくれると信じており、その様な出会いによって自分自身も成長できると考える。また自分は一年間休学しようと考えており、来年も学業に励む事になる。しかし、自分が目指す人間になるためにはまだまだ足りていないと感じている、自分の理想に近づく事が今後の課題であると思った。記者の方々とお話しする中で自分が何をしたいのか、そしていままでしてきた中でどうなってきたのかという事を深く考えさせられるようになってきた。自分がより良くこの先の人生を生きるためには自分の中にある課題の克服と長所を伸ばすことが先決であると考えている。自分自身いたらぬところ

は沢山あるが自分色にキャンパスライフを染めるために出来る事はもっとあるはずである。就活の準備という近眼的な視点だけではなく、これからの人生という大局観から残りの大学生生活を過ごしてきたいと考えるようになった。

- 私は今回のインターンシップを通して新聞記者の魅力を知るとともに、就職に対する関心が高まった。しかし、私が見た社会人の方々というのは、その全体の一部に過ぎない。他の職業と比べずに就職先を決めてしまうのは、あまりにも浅はかな行動だ。今回、大本命とは言えない職業のインターンシップで、こんなにも価値観が変えられてしまったのである。世界はまだまだ広い。この大学生という自由な身分を使って、より多くの職業を知りたい、そう強く思うようになった。
- 今回のインターンシップで、自分の社会に対する関心の低さを実感させられた。今後社会に出ていくうえで、社会の出来事に対する関心が必要だと私は考える。また、その出来事に対して自分はどうか考えるか、何を思うかがとても重要であると思った。今後の学生生活では今まで以上に新聞やニュース等により目を向け、それらに対するのしっかりとした自分の意見を持ち、またそれによって何が起こるのか、何に影響があるのかなどさらに幅広い視野を持てるように意識して今後の学生生活を過ごしていきたい。
- 今後の学生生活において、まずは新聞を作るという意味から述べると、今回のインターンシップを通して自分が所属している新聞部での活動にも生かせる点が多く発見できたので今回学んだ知識を生かしていきたいと思います。また、一学生と言う観点から述べると、新聞社に関わらず今回のインターンシップを通して「社会」というものが分かったように思います。また、働くことの大変さややりがいというものも肌で感じる事が出来、座学では学べない「生きた知識」を身に付けることが出来たように思います。貴重な機会を与えていただいたことに感謝します。